

# 文法（史的研究）

近藤泰弘

## 1、総論

今回の展望（文法・史的研究）では編集委員会からの要請で、ここ数年分れていた古代と近代とを一括して扱うことになった。この二分野は伝統的に、同じ文法の史的研究であっても方法や対象の点でやや異なったやり方をしてきたように思える。（古代語では文法論または解釈文法、近代語では活用の変化や敬語の様相など。例えば、前回の展望へ137号）ではその分類など、二つの間でかなり異なった記述となっている。今後はそうではなくなつてゆくべきであるという見解を委員会が示されたものと考え、なるべく統一的に記述することに努めた。なお紙幅の関係上語彙に関わるものは多く取り上げられなかった。

古代語の文法研究には色々な方向が有り得るが、一つには古代語研究にはそれに独自の方法論を見いだす方向がある。もう一つの方向は現代語研究に見られる方向を積極的に取り入れて行く立場である。現在の研究動向はどちらかと言えば後者の方に近い様である。例えば、テンス・アスペクト・ムードなどの用語は現代語研究から最近になって導入された概念であり、ほんの十年ほど前までは古代

語研究とは縁のないものであつたことを考えれば充分であろう。従つて、今後もこの傾向は続くものと考えられる。

用語の面だけでなく、研究の内容の点でも新しい方向は見られる。それはいわゆる「非文」を古代語研究においても研究対象とするようになったことである。「非文」とは文法的に存在不可能な文のことであり、「非文法的」(ungrammatical)な文とも言われる。もちろん現代語の場合とは異なり話し手の語感によつてそれを判別することはできないために完全な判断は不可能であるが、おおよそは用例の有無により判別できる。例えば次の文は文献(1)によれば、いずれも非文であることになる。

\*君はいづくになむおはしますらむ

\*誰こそ行くらめ

これらの文がなぜ存在しないのかを研究することで「なむ」や「こそ」の文法的特質を記述することが可能になるわけである。このような研究自体今まで全く無かつたわけではない。例えば、山田孝雄の『日本文法論』などにある助詞の相互接続表などは、存在しない組み合わせをも知ることが出来るという意味で先駆的な研究と言える。しかし、そうではなく、はっきりとこの文は存在しないという

ことをのべ、それによつて古代語の構文現象を説明するようになったのは近年の傾向と言える。北原保雄の『日本語助動詞の研究』などはそれを体系的に行おうとした代表的なものである。この著については現代語と古代語が併せて記述してある点がわかりにくいとされるなど、必ずしもその真価が理解されていないように思うのは評者だけであろうか。評者はこの著の前半のいわゆる北原文法の整然とした体系よりも、後半のやや整わないかに見える部分により魅力を感じるのである。

古典の中に見られる文を解釈するということだけなら、「非文」の研究などは不要である。しかし、古代語の文法体系について正確な構文規則を知るためにはどうしても、なぜある文が存在しないかということの研究しなくてはならないであろう。

59・60年度の論文の中にもその傾向は多く見られる。以下、そのことにも留意しながらこの年度を代表すると思われるものについてまずとりあげてみる。

大野晋は近年、助詞の通時的研究についての論をいくつか出しているが、今期では係助詞に関する長大なものがあつた。(1)『日本語の構文——係助詞の役割(一〜五)』(『文学』昭59・12、昭60・9)またこの内容に追加して補うものとして(2)『ハとガの源流』(『国語と国文学』昭61・2)。これらは従来「や」と「か」のみについて問題とされてきた疑問詞との相互承接についてその他の係助詞についても拡張して既知・未知という要素による談話法的特性について明らかにしたものである。この研究についても旧来の解釈文法的方法も用いられてはいるものの「も・ぞ・か」は疑問詞を承けるが、「は・こそ・なむ・や」は疑問詞を承けないという基本的な構文の制限(即ち先の

「非文」の概念)をもとした議論であるために大筋において納得できる物となつてゐる。係結の起源を倒置に求めること(大野の古くからの持論でもある)は私見では充分な証拠が無いと思う点など、全面的に認めるわけではないが、いずれにせよ今後の係助詞研究において必読のものであろう。どちらかといえば古い世代の研究者に属する大野が新しい方法論を用いて自己の研究を進展させていることに敬意を表するものである。

(3) 山口佳紀『古代日本語文法の成立の研究』(昭60)は著者の長年に渡るこの方面の論文をあつめたものであるが、ごく最近の論文も取められ書き下ろしと言つて良いところも多い。山口の研究は必ずしも新傾向ではなくオーソドックスな方法である。またどんなに機械的に扱つてゐるようで見えてもかならず個々の文の解釈をおろそかにしないことに特色があると思う。国語学のよき伝統であるし、言語研究にあつてやはり忘れてはならないことであると自戒する次第である。内容的には叙法を扱つた部分に構文論的な新見が多い。

柳田征司は今期も精力的な活動を見せた。(4)『音韻脱落、転成、同化の原理』(昭59)、(5)『室町時代の言語』(昭60)、(6)『動詞の語幹未に生じた母音連続(上・中・下・統上・統下)』(『国語国文』昭59・2、3、4、5、6)などいずれも文法の広い範囲に渡るものであるのとでもここでは触れ切れないがいくつか述べておく。(4)(6)はいずれも音韻変化というものを体系的にとらえることを重点として記述されたものであり、体系への指向という点で極めて注目すべき論である。個々に問題は含むものであるが、高く評価されるべきものである。特に評者にとつて興味深かつたのは(6)に含まれる動詞の他動性についてのものと(5)で展開された係結および格助詞についての議論

である。特に(5)の沖繩方言も考慮した考察は画期的である。評者自身は別の考えを持つものであるが、研究の方向性については同感である。

(7) 久島茂「格助詞ガの意味の分化について」(静岡大学教育学部研究報告)人文社会科学篇36、昭61・3)は現代語の格助詞「が」に見られる「排他的」意味を古代語の「が」の「強く指示する」という特性に起源を求めるものである。「強く指示する」ということの説明がやや弱いかとも思うが全体的にはよい説明になっていると考えられる。先の大野論文とは表面的には必ずしも合致しないが、将来的には理論的に統一できるであろう。

構文法の理論的な面からの研究では次をあげておきたい。

(8) 仁田義雄「係結びについて」(研究資料日本文法)5、助詞、昭59・3)では係結が従属句ではなく主句に現れやすいことから、係結は「伝達のムード」に関わるものであると述べている。これも現代語研究における問題意識のよい適用例である。主観性と係助詞の問題はいわゆる陳述の問題として古くから取り上げられたことであるが、ムードというところえかたによつて、他言語との比較が可能になるなどそのメリットは大きい。「陳述」とか係結のあり方を日本語の独自性と考えることなく、ムードの体系としてとらえることは古代語文法の基本的方法になるべきであると評者などには思われる。

今期の大型の企画としては次があった。現段階の各種の方法論を通覧するのに便利なものである(極めて多くの論文が収められているため個々の論の紹介はここでは省かせて頂きたい)。全体で十巻にもなるもので筆者も多彩である。

鈴木一彦・林巨樹「研究資料日本文法」(昭59・60)

なお既に評価の定まった文法史にも関連する論文が単行本の形でまとめられたのはありがたい。次のようなものである。

春日政治「春日政治著作集」(昭59)

浜田敦「日本語の史的的研究」(昭59)

亀井孝「日本語のすがたところ」(昭60)

岸田武夫「国語音韻変化の研究」(昭59)

佐藤武義「今昔物語の語彙と語法」(昭59)

鈴木博「室町時代語論考」(昭59)

小久保崇明「大鏡の語法」(昭60)

書評の対象になるべきものばかりであるのでここでは内容にはわたらない。

## 2、各 論

### 2・1 形態論・発生論

上代以前の語形成を論ずるのは困難なことである。先の(3)、(4)にも言えることであるがどこまでも可能性の域を出ない面もある。高い論理性が要求される所以である。(9)はそれに一つの方法で答えたものと言えよう。

(9) 中山昌久「動詞の活用」(研究資料日本文法)用言(昭59)では従来の動詞活用についての整理を改める新しい考え方が提出されている。(10)「強式について」(国語と国文学)昭59・1)ではその方法に依つていくつかの方言の動詞活用が記述されており、動詞の本来の性格について多くの証明を挙げて説いている。重要な指摘であると考え、難解な記述のために理解をはばんでいる部分があるのが残念である。更にわかりやすく述べれば説得力を増すと思う。(11)工

藤力男「古代日本語における覺語の変遷——イトドからイトイトへ——」

〔万葉〕122、昭60・8)はいつもながらの斬新な論で極めて興味深い。新しい語形成のタイプをひとつ明らかにしている。(12)沖森卓也「形容詞の成立」(『日本語学』4・3、昭60・3)では形容詞の活用の古い体系を考えようとしているが、「現実化」「可能化」の語の言語学的定義がはっきりしないようにおもえるのが難点である。

(13) 柄沢明子「中古物語文学における形容動詞の語構成について」(『中央大学国文』27、昭59・3)は記述的で妥当な解釈である。

## 2・2 用言・助動詞一般

(14) 安田章「已然形終止」(『国語国文』53・5、昭59・5)は「重刊改修捷解新語」に見られる「こそ」のない単独の已然形終止を問題として、已然形終止が中世において韻文の世界で独特の表現価値を持ったものとして認められていたのではないかと説く。ともすれば、シNTAX論の中で誤用として無視されがちな語法に光をあてたものであり、文語というものの機構解明に役立つ論である。

## 2・2・1 ボイス(自他・使役・受身)

ボイスの研究は現代語においてもやや行きづまりが見られると思う。つまり「使役」「に使役」についてあまり進展がなく「を」と他動の関係についての論もすくない。「によって受身」について論争があるのが最近のトピックスであろうか。古代語でもやや活気がない分野である。その中で(15)(16)などは目立つものである。

(15) 井藤幹雄「軍記物における特殊な使役体「討たス」「射サス」」(『国学院雑誌』86・8、昭60・8)はこれらの使役が通常言われているような文体的なものというよりも、直接受身・間接受身に依る分類によれば、シNTAXスよりの現象であることを説いたものである。

「射サス」の方にやや問題は残るが、新しい角度の論として認められよう。(16)鈴木英夫「『ヲ自動詞』の消長について」(『国語と国文学』62・5、昭60・5)は、明治以降の近代語の資料を用いてこのタイプの文型の整理を図ったものである。須賀一好の「自他違い」(『馬淵和夫博士退官記念国語学論集』昭56)の中でも一部論じられたことであるが、歴史的観点を導入したことにより新たな発見がある。現代語の文法研究の一つの方向であろう。(17)堀畑正臣「平安時代の記録体資料に於ける「令(シム)」について」(『国語国文学研究』19、昭59・3)もあつた。

## 2・2・2 アスペクト(完了・継続)

アスペクトについては「つ・ぬ」「り・たり」の別という伝統的なものが今期も多い。それはそれでいいのだが、奥田靖雄「ことばの研究・序説」(昭60)の中でしめされたような、アスペクト研究とは何をするべきかという全体的な見直しもそろそろ古代語にもあつてよいのではないだろうか。

(18) 近藤明「助動詞「り」「たり」の勢力関係の変遷——平安時代和文を中心として——」(『文芸研究』107、昭59・9)「助動詞「り」「たり」の活用形の偏在をめぐって」(『国語学研究』24、昭59・12)では丹念に両助動詞の用法が記述されておりわかりやすい論となつている。特に後者の論では未然形の用法において否定表現となると「り」・「たり」が消失するという可能性に次いで述べているのは極めて興味深い。

(19) 竹岡正夫「助動詞「つ」の意味——平安朝歌合判詞から——」(『中古文学』34、昭59・10)は当時の権威者の言語説明意識から「つ」の意味を探る試みである。(20) 滋野雅民「今昔物語集における「来」の用法と訓法について——来レリ・来タリを中心にして——」(『東京聖徳短期大学紀要』18、

昭60・3)は訓読と「来」と完了をあつかう。まだ未完であるが今後が楽しみである。(2)進藤義治「源氏物語文中の往還系概念動詞に下接する「つ」「ぬ」」(『国語国文学』(名古屋大学55、昭59・12)は従来の進藤の方法の上に乗ったもの。

## 2・2・3 テンス(過去)

(2)鈴木泰「き」と「けり」の意味とその学説史」(『武蔵大学人文学会雑誌』16・3、昭59・12)は「き」を古印欧語のアオリストに、「けり」を同じく未完了過去に近いものと考える立場から従来の学説を整理している。その限りでは納得できるが、それによって新たな構文現象が発見でき、その説明がそれによつてのみ可能であるということでないはまだ不十分だと思ふ。鈴木はテンスを再構成するという試みを行っているのだが未だ充分に説得的でない。動詞の終止形のテンス的な意味など(2)などが指摘するが「まだよくわからないのではないだろうか。(3)山口明穂「いま助動詞・助詞で何が問題か」(『国文学』29・8、昭59・8増刊号)は、時の表現について、文語との関係からその体系的変化を考えたいものである。さらなる体系化を待望する。(4)金田弘「なかつた」考」(『国語と国文学』62・5、昭60・5)は近代語の資料から「なかつた」という語法の発生を考えたいものである。正面から問題をとらえた好論である。

## 2・2・4 ムード(推量その他)

古代語のムードという概念はいまだ一般的ではなからう。しかし既に(3)のようにムードの体系を指向するものがあることは示唆的である。今後の分野である。

(2)山口堯二「疑問表現の否定」(『国語と国文学』61・7、昭59・7)はいわゆる否定疑問文のメカニズムに焦点を当てたものである。「疑

問」の本質に迫るものである。(2)重見一行「なるらむ」構文における原因理由推量のメカニズム」(『国文学攷』106、昭60)(2)「らむ」構文における原因理由推量のメカニズム」(『比治山女子短期大学紀要』18、昭59)は「らむ」と「なり」の関わりについて論じたもの。(2)小松登美「和泉式部歌における「まじ」」(『跡見学園女子国文学科紀要』12、昭59・3)は解釈に与える影響を説く。(2)高瀬正二「古今集遠鏡」に於ける推量の助動詞について」(『国語国文学報』41、昭59・3)は現代語への移行の姿を示す。

## 2・2・5 コブラ(断定の助動詞・存在詞)

「なり」「ぢゃ」などのコブラ(繫辞)は日本語に特徴的な要素である。形容動詞の語尾としても働いておりその点でも研究の価値が高い。今期も研究が多い。

(3)櫻井光昭「今昔物語の断定の助動詞ナリの周辺——ニアリ、ニテアリと——」(『国文学研究』85、昭60・3)は「なり」に近い働きをする二つの表現をとりあげて、その二つが相補分布をなすことを示したものである。新しい視点を示したものと言える。(3)鈴木泰「ナリ述語」と「ヘタリ述語」(『日本語学』4・10、昭60・10)は氏の旧来の研究のまとめ的なもの。東辻保和「ものなり」表現の系譜について」(『鎌倉時代語研究』7)は文体と文法の関わりを論じて興味ぶかい。(3)重見一行「連体なり」構文の構造」(『国文学攷』103、昭59・9)(3)「主述句を承接する「連体なり」構文の構造」(『比治山女子短期大学紀要』19)では北原・大木による「連体なり」の解明を承けて更に新情報・旧情報という点から分析するものである。不明な点もあるが、新しい構文情報を示し得ているところも有ると思う。(4)石川洋子「近世「也」字の付訓について——漢文の語末助辞「也」字と指定の助動詞「ナリ」

を中心として——(『実践国文学』28、昭60・10)は春日和男の訓点語の研究の近代版ともいえるもの。(35)円井武「狂言台本の『げな』と『そな』」(『香川大学国文研究』9、昭59・11)は中世特有のコブラなどに続く推量表現の研究。

2・2・6 形容詞

(36) 森野宗明「形容語の変遷」(『日本語学』4・3、昭60・3)は、古典文学の古注を参考にして「をかし」の語義の変化を追ったもの。(37)新里博樹「万葉集におけるへーケシ型」形容詞について」(『国学院大学大学院文学研究料論集』11、昭59・1)は特有の意味要素と語構成を扱ったもの。(38)今西浩子「今昔物語集の『多力』をめぐる」(『国語年誌』3、昭59・11)は位相的研究。(39)坂詰力治「お伽草子の形容詞について」(『文学論漢』60、昭61・2)も位相的観点を取り入れたものである。

特にこの分野でめだつた傾向はなかった。

2・3 体言(名詞・代名詞)

(40)清瀬良一「天草版平家物語の自称代名詞」(『国語国文学報』41、昭59・3)は用法の分類。(41)外山映次「大淵代抄における『様(ヤウ)』の用法について」(『埼玉大学紀要教育学部』32 II、昭59・3)は外山の一連の研究の一環をなす。(42)近藤政美「天草版平家物語における『わが』の用法について」(『国語国文学』名古屋大学56、昭59・7)は、漢字「我」の読みから、特殊な「わが」の用法が正まれたとする。キリシタン資料独特の問題である。

2・4 連体・準体

連体や準体はまだ手があまりつけられていない。まだ構文法的な多くの研究が可能であろう。(43)はその中でひとつの方向性を示した

ものである。

(43)三宅清「特殊な連体修飾について——源氏物語を資料として——」(『国学院雑誌』86・4、昭60・4)は「さうさうしくつれづれなる(気持ノ)慰めに、いかでをかしからん児もがな」(『源氏物語』橋姫)のような、言葉を補うべき連体構造について構文的に分析したものである。基本的定義がまだ曖昧性を残すと思うが、興味深くさらなる発展を期待したい研究である。

(44)大藤重彦「古呂賀於曾伎能安路許曾要志母——準体言の視点——」(『現代方言学の課題』3、昭59)は準体についての一つの場合を示したものである。

2・5 連用・副用語

現代語では「副用語の研究」の刊行などに代表される新たな連用語論というべき流れがある。古代語にも明らかにその影響がみられ、(45)のような高いセンスの研究が出て来ている。(47)(48)などもその流れの中にあるものである。

(45)北澤尚「共時過程と文法記述」(『国語学』143、昭60・12)は、品詞として色々な立場に現れる「うたて」という語の分析を通して「共時過程」という概念について述べたユニークな論である。そのいわゆる「共時過程」というものは、形態音韻論における「内的再構」(例えば、「あめ(雨)」に対する「あまぐも」を、*ama* から *ame* への変化の過程を示すものとしてとらえるなど)とほぼ同様なものとして評者には思われたが、どうであろうか。そのかぎりにおいては賛成であるし、応用もきくと思う。しかし、通時的なものと関係ない「共時過程」というものがあるならば(そのようなことも許されるように読めるが)それは極めて理論的な抽象物であり、結局はそれぞれの

〔文法論〕そのものになるのではないかと思う。(46)竹田純太郎「万葉集」について(『仏教大学通信教育部論集』18、昭59・3)は工藤力男「形状言による副詞句の形成」(『万葉』103、昭55)を承けて「肥大形」を更に詳しく分析し「カニ形」という新たなタイプを発見したものである。上代語の形態論に寄与するものと言える。(47)田村清子「副助詞の変遷——その契機の解明を中心に」(『国語と教育』9、昭59・12)(48)秋山まどか「副詞「おのづから」統考——平安仮名作品よりみたる——」(『野州国文学』35、昭60・3)などは方向性は良いが、まだ古い方法を捨て切れていない。

## 2・6 接続

「ずは」をめぐっていくつかの論があつた。まだ今後にも検討を要するものと言える。(49)桑田明「上代語」一種の「ずは」の解明「は」「も」の意味・職能の考察と関連させて」(『国文学言語と文芸』95、昭59・6)(50)宮地幸一「ずは・なくは考」(7)鎌倉時代資料の考察(4)「(『帝京大学部紀要 国語国文』16、昭59・10)(51)鈴木義和「いわゆる逆接の「ねば」について上代語の偶然確定条件法」(『国文学研究ノート』17、昭59・6)

接続助詞「て」については

(52)竹端瞭「古代語にみる接続助詞、て、のはたらき」(『鹿兒島女子大研究紀要』5・1、昭59・2)がある。

こうして見てくるとわかるように接続の研究は重大な問題である割にいかにも少ない。まだなすべきことが多いと思われる。

## 2・7 格・格支配

格助詞の研究もまことに少ない。次のものぐらいである。語彙の研究としては徐々に動詞と格支配の問題も取り上げられてはいるが

まだまだである。現代語における、森田良行「基礎日本語3」の質量に匹敵する研究が必要である。

(53)夏井邦男「格助詞「より」の接続上の問題」(『北海道教育大紀要』IA・34・2、昭59・3)(54)渡辺仁作「にとりて(にとつて)という表現」(『解釈』30・2、昭59・2)(55)木坂基「たけくらべ」の本文校訂にかかわる表現事象について——連体助詞「のが」の用法」(『国文学攷』107、昭60)

## 2・8 敬語

敬語については今期も研究が多い。やや個別的なのが他の分野に比べての特徴であろうか。しかしそれは決して良いこととは言えない。中世や近世に優れたものがめだつた。逆にそれらの時代では研究対象が敬語にかたよっているとも言える。

(56)見野久幸「説話に於ける「一奉る」「一参らす」」(『国語学』136、昭59・3)はその中であつて多くを配慮した広い範囲を扱つたものである。他には(57)此島正年「聞えさす」「聞えさせ給ふ」——源氏物語における用法——(『国学院雑誌』86・12、昭60・12)(58)藁谷隆純「とはずがたり」の敬語」(『創価女子短期大学紀要』1、昭60・12)がある。(59)小林千草「終助詞ゾと敬意表現 虎明本狂言を中心に」(『国語学』136、昭59・3)はキリシタン版の規範性について改めて問題提起をしたものとなつている。注目すべきものである。(60)大久保一男「対面」の敬語性」(『国語研究』47、昭59・3)(61)森昇一「尊敬動詞に下接する助動詞「る」「らる」について」(『野州国文学』33、昭59・3)はそれぞれの一分野を扱つたものである。

和化漢文における敬語研究も盛んであつた。(62)林勉「兼方本日本書紀神代卷上訓点の敬語表現」(『五味智英先生追悼上代文学論叢』昭59)

(63) 榎本福寿「日本書紀の敬語「奉」をめぐって」(『仏教大学研究紀要』68、昭59・3) (64) 穂田定樹「御堂閑白記・小右記の敬語、敬語表現(13)」(『岡山大教育学部研究集録』65、昭59・1) (65) 西田直敏「伏見天皇宸記」の敬語表現」(『北海道大学文学部紀要』57、昭60・3) (66) は「行幸」などの非敬語性を述べたもの。

中世以降の敬語研究は補助動詞についてのものが大部分を占めている。

(66) 三角文「宇治拾遺物語における「待り」と「候フ」」(九州大谷国文』13、昭59・7) (67) 来田隆「洞門抄物に於けるゴザ(ア)ル・オリヤルについて」(『福岡教育大学紀要』33・1、昭59・2) (68) 大倉浩「版本狂言記の「おりやる」と「おじやる」——詞章整理のあとづけ——」(『日本語と日本文化』5、昭60・11) はてがたい基礎的な部分を述べたもの。(69) 伊坂淳一「コナタ・ソナタと述部待遇語句の呼応 狂言台本とキリシタン文献を総合する観点から」(『日本語と日本文学』4、昭59・12) は述部と代名詞の呼応から総合的に扱おうとした意欲的な論である。

きりしたん文献を用いたものとしては次がある。

(70) 林重雄「「サントスの御作業」における敬語接頭語について」(『石川工業高等専門学校紀要』16、昭59・3) (71) 土屋信一「浮世風呂・浮世床の敬語二題」(『香川大学国文研究』10、昭60・9) はパソコンを用いた計量的研究。

2・9 談話法(主題・係助詞・終助詞)

係結による「卓立」や「主題」の問題、また終助詞等による「詠嘆」の表現、即ち広義の談話法に属する研究は古代語研究において基本的なものである。今期も盛んであった。冒頭に触れたものにも

大野の研究を始めこの分野のものが多い。ますます体系化への指向は強まるものと思う。

(72) 小澤久子「助詞「や」について——「万葉集」における「か」との比較研究」(『学習院大学国語国文学会誌』28、昭60・3) は両助詞の承接や述語助動詞について従来よりも詳しい分析を行い新しい規則を発見している。しかし結論は常識的でやや物足りないと思う。

(73) 三宅尚子「不定語を含む疑問表現の類型——上代・中古の和歌について——」(『研究ノート』(神戸大学) 昭60・9) は疑問詞を含む構文についての分析である。これも記述は詳しく参考になるが、もつとシタクティックな説明が欲しい所である。

疑問詞の持つ「不定」という性格を基本的に考えるという困難な作業にいどんだのは次である。(74) 山口莞二「不定方式の不確定成分——疑問詞の不確定用法——」(『国語国文』54・1、昭60・1) 接続表現で示された考え方の応用ともいうべきものである。(75) 小松登美「和泉式部集における係結びについて——その一——」(『跡見学園短期大学紀要』21、昭60・3) は厳密な本文校訂を経ても残る係結の異例を調べ単独の已然形終止などが平安時代にも行われていた事を説く。(76) 山口雄輔「流布本「狭衣物語」の係り結び——係助詞の分布とその型——」(『文教大学国文』14、昭60・3) (77) 坂詰力治「御伽草子」の文章」(『武蔵野文学』32、昭59・11) はいずれも係結についての記述である。(78) 近藤泰弘「結びの用言の構文的性格」(『日本語学』昭61・2) は冒頭に挙げた仁田論文とおなじような方向で、係結といわゆる「連体止め」との差を説いたものである。(79) 三浦法子「御伽草子」の係助詞」(『岡山大学国文論稿』12、昭59・3) は(7)と期せずして合い補うもの。終助詞では次があった。



(80) 品田紀子「助詞「かな」「かも」の構文的研究」(『国文目白』23、昭59・2)は助動詞との承接を記述したものの。(81) 小久保崇明「けしうはさふらはぬとしなりな」考—間投助詞「な」をめぐる—」(『解釈』31・5、昭60・5)は「な」についての従来の理解を正すところがあり、有益である。

## 2・10 連文(修辞法・その他)

(82) 出雲朝子「はさみこみ」について—文法史的考察—」(『国語学』143、昭60・12)は「はさみこみ」に古い語法が残ることを明らかにし、並立助詞「し」の発生などに新たな説明原理を導入したものである。非常に新鮮な論であり、中世語に詳しい筆者ならではの論である。ただ、その原因を「陳述」の有無に求めたのはやや論証が不足している。なぜ上代や中古の「はさみこみ」が後世のものとなり、「普通の文が自由に用いられる状態」であったかの説明がなければならぬ。出雲の意図を推測するならば、発生当時の「はさみこみ」は活力があったと考えているのではないか。しかし、「はさみこみ」の発生が上代であったという証拠は全くないであろう。

(83) 中村幸弘「連語『さるものにて』について」(『国学院雑誌』85・4、昭59・4) (84) 大木正義「蜻蛉日記における二重引用—五十八年九月号を読んで」(『日本語学』3・6、昭59・6)などは文章論と文法の関わりを示したものでおもしろいと感じた。

## 2・11 全般に渡るもの

(85) 小松寿雄「江戸時代の国語江戸語」(昭60)は江戸語の概説ともいふべきものであり、まとまったものの少ない中で貴重なものである。文法についても極めて多くの記述がなされており有用なものとなっている。

(86) 阿部健二「国語文法史論考」(昭60)は著者の遺稿集である。ややあけずりではあるが野心的な論が含まれている。

極めて限られた紙幅(やや規定を超過したが)で述べたため、多くの論を割愛せざるを得なかった事をお詫びしたい。また見落しや読解の不足で失礼した部分も多いと思う。御寛恕を乞う次第である。なお、収載範囲は昭和59年1月から昭和60年12月までを原則としたが、時に昭和61年3月までのものにも言及した。不統一をお詫びする。

〈付記〉入手困難な一文献について金子彰氏のご好意で扱うことができた。ここに記して感謝申し上げる次第である。また、抜刷等を御送付下さった方々にも厚く御礼申し上げます。——日本女子大学講師——